

# 万博遺産

橋爪節也  
Hashizume Setsuya

## 第4回

### 呼び覚まされるときが来た時代の感覚 — EXPO'70と前衛音楽



鉄鋼館内のホール「スペースシアター」の天井、壁、床下には1008個のスピーカーが配置され、建物全体が巨大な楽器のようだった。現在、鉄鋼館は「EXPO'70パビリオン」として万博記念公園にて公開されている。  
写真提供/大阪府

三菱未来館で配布されていたパンフレット。館内では最新の映像技術を駆使し、日本人が自然に打ち勝ち未来を切り開く姿をドラマチックに演出していた。  
提供/橋爪節也



2021年1月9日に行われた、シュトゥックハウゼン『マントラ』関西初演舞台写真。第1ピアノ 大井浩明(右)、第2ピアノ 浦壁信二(左)。  
© 芦屋市民センター



「一九七〇年の音を聴く」と銘打ち、今年一月、芦屋市民センターのルナ・ホールで、ドイツの作曲家カールハインツ・シュトゥックハウゼン（一九二八～二〇〇七）の二台のピアノと電子音響のための『マントラ』が演奏された。『マントラ』は仏教の「真言」のことで、作曲家が大阪万博の西ドイツ館での演奏に来日中、京都、奈良で着想を得た作品である。二人のピアニストは向きあって禅問答や演歌にも似た旋律の断片を奏で、電子音響が流される。さらに手で打楽器を操り、木魚や鉦を思わすリズムを叩いていく。

「響き」「花」「間」に由来し、「スペース・シアター」EXPO'70鉄鋼館の記録」(ソニー・ミュージックレーベルズ)で聴くことができる。

三菱未来館では、動く歩道で突き進む観客を、『ゴジラ』の田中友幸プロデューサー、円谷プロが制作した火山の噴火や大津波などの特撮映像が押し包んでいく。音楽を伊福部昭が担当し、大好きな怪獣映画のスクリーンに投げ込まれた感じだった。

一八八九年のパリ万博ではドビュッシーがガムラン音楽に触発されたが、大阪万博でも世界の民俗音楽とともに、先端の音楽が鳴り響いた。会場に押しかけた観衆も、未来的な音響の世界を、とまどいながらも体感したに違いない。

大阪万博は当時中学一年生の私が、前衛芸術を初体験した場でもある。

大阪では、一九六三年(昭和三十八)から「大阪の秋 国際現代音楽祭」(第十五回で終了)が開催され、美術では、吉原治良をリーダーとする具体美術協会が、本拠地である中之島の美術館「グタイピナコテカ」で積極的に活動していた。

鉄鋼館では、天井から床下までを埋め尽くしたスピーカーから流れるヤニス・クセナキス(一九二二～二〇〇二)の『ビビキ・ハナ・マ』を聴いた。ギリシャ生まれの作曲家はル・コルビュジエに建築を学び、一九五八年のブリュッセル万国博覧会ではフィリップス社のパビリオン設計にも携わっている。曲名は

『マントラ』の関西初演で、そうした時代の記憶がよみがえった。このとんがった時代の感覚が好きである。

#### ◆ 橋爪節也 (はしづめ・せつや)

大阪大学総合学術博物館教授、同大学院文学研究科兼任。1958年、大阪府大阪市生まれ。東京藝術大学大学院修了。大阪市教育委員会事務局文化財保護課、大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室学芸員等を経て現職。専門は日本近世・近代美術史で、『橋爪節也の大阪百景』、『大阪イメージ 増殖するマンモス/モダン都市の幻像』(創元社)など著書多数。ドラマの時代考証も手がける。